

Title	学会報告
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 95-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52446
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

学 会 報 告

第11回研究会 37年7月7日(土)

於京都工芸繊維大学工学学部

報告

「インドの旅」

京都工織大 福永 俊治氏

——カラースライドによる——

シンポジウム

「ヒューマンエンジニアリング(人間工学)」

司会 京都工織大 河本 敦夫氏

パネリスト

京都美大 向井 正也氏

京都美大 三浦 伝氏

京都工織大 中村雄二郎氏

大阪市大 中嶋 朝子氏

河本氏の司会によって、まず同氏から本問題をシンポジウムの論題として、とり上げる意味の説明があった。それによると「ヒューマンエンジニアリング(人間工学)とは一般には耳新しいが、欧米では戦前から存在し、近年、日本でもこれがデザイン界で問題になっている。今後これとデザインとの関係をさぐるため、日常その研究にたずさわっておられる四氏に、一応の概念を規定してもらうことから始める」と。そして、中村氏からまず、その一般概念及び研究の現況の説明があり、三浦氏からは工作機械の立場における人間工学の様相が説明され、向井氏は建築の立場からの説明があり、中嶋氏は被服における人間工学の入りこむ領域の説明があった。問題が今日的である点から、極めて活潑な議論がかわされた。その経過は省略するとして、その結論は、井島会

長の閉会の弁を借りてのべると、「芸術の美よりも人間の美が重要である。ギリシャの哲人の言葉、人間がすべての尺度である、を思えば、デザインの世界にあっても人間工学の問題は重要であり、今後のデザインを考える上において、人間工学の果すべき役割は見逃しがたい。ただし、いままでの人間工学が、人間中心から出発しているといいながら、自然科学的色彩が濃厚という風に見受けられるならば、流動してやまない人間の歴史的概念を決定するには至らない。いわば、そこに今後の人間工学の果すべき道があり、それはヒューマンな内容をもつデザインからの要請によって、正しい道がえられるべきものである」と。

第12回研究例会 37年10月6日（土）

於京都市工芸指導所

研究発表

「イランの自然と美術」 京都美大 中井 貞次氏

「ペルシャの陶器」 〃 小山 喜平氏

「伝統工芸のリデザイン」 京都市工芸指導所 片山 行雄氏

中井、小山両氏は61年10月から62年7月にわたる10ヶ月間、4万キロを自動車で踏破された報告である。その詳細は次号にゆずる。片山氏は「伏見人形について」という副題があり、伏見人形の歴史の様相とその現況の説明がスライド及び8ミリ映写を加えてなされ、滅びゆく民族芸術への萬人への関心を喚起されると同時に、滅びるものの宿命的欠陥に鋭いメスを入れられた。

第4回研究大会 自 37年11月16日（金）

至 87年11月17日（土）

第一日

研究発表

「結繩文について」 関学大 吉村 元雄氏

——スライド使用——

「外部空間のラフスケッチ」 兵庫工高 菅原 亮氏

「設計組織と管理について」 新三菱重工 田中 弥氏

「フォルム概念吟味より意匠学の問題を論ず」 龍村 謙氏

シンポジウム

「クラフトとデザイン」

司 会 京都工織大 河本 敦夫氏

パネリスト 京都市工芸指導所 片山 行雄氏

大阪市大 高田 克己氏

デザインハウス 坪井 恭平氏

京都美大 元井 能氏

「クラフトとデザイン」について、まず、元井氏から、その両者の一応の概念が示され、クラフトとデザインがはたして対立的に取りあつかえるかどうかの疑点があるが、もし対立的とすれば、クラフト・デザインとインダストリアル・デザインとしての対立としての設定が示され、次いで、片山氏がクラフトデザインの条件を示され、機能、コスト、行程、材質からの説明があり、高田氏は伝統工芸としてのクラフトデザインを中国文献から示され、最後に坪井氏のクラフトデザインの現代的意義からの説明があった。共同討議の場では、予想外の論議がかわされたが、結論的には、「近代産業の高度発展が必然的に生んだ缺陷として、クラフトデザインが意識され出したのは、人間性喪失の回復に外ならず、そこに問題の焦点があり、単なる過去のノスタルジーの満足でなく、積極的に純粋な人間性の発見への示唆をふくむもの」としてのクラフトデザインの意義が見出された。

第二日目

研究発表

「I・Dに於ける現代造形感覚」 布施市工芸指導所 高橋秀雄氏

見 学

京都府陶工訓練所

藤平窯業株式会社

京都国立博物館

被服部会第1回研究例会

37年12月22日(土)

於京都女子大学

講 演

「被服美学断想」

京 大 井島 勉氏

要 旨

芸術のさまざまな種類の美学上の考察は、西洋の美学書においても、くりかえし発表されてきたが、被服に関する考察ははなはだ乏しかったし、日本においても、十数年来、各種の美学的研究の発表がなされた美学会においても、被服のことが取りあげられたのはきわめて最近である。このような事情は美学の怠慢であったわけで、被服が美学的研究の対象に値しないという理由ではなく、美学的研究の対象があまりにも多種類にわたり、被服にまで手を及ぼすことができなかったからである。当然、被服に関する美学的研究はなされねばならず、美学的知識のある、しかも被服について精通した人によって、これからの課題として、被服美学が確立されねばならない。

(1)概念規定について

被服美学とよばれ、あるいは被服造形学とよばれようと、今日それらの学問的内容は決してゆたかではない。被服についての深い考察は常に学問的態度でのぞまねばならず、この両者についても、一応の区別をしなければならない。被服造形学とは、被服造形に関する学であり、被服に関する広範囲な内容を含み、慣習、材料、衛生、経済などさまざまな条件に基づいて、被服が成立する以上、それらの条件をみとすべき、隣接諸学との関係も深い。しかしながら、ひるがえって、被服美学という立場を考えると、「被服美の学」としての被服美学ではなく、「被服の美学」という視野の広い分野からの考察を進めるとき、被服美学は被服造形に関する学問の中心的、且重要な役割を演ずべき性質

の学問といえよう。

(2) 一般美学と被服美学について

われわれの過去における芸術的論議は封建的であった。俳諧の世界はその第一であり、歌舞伎も同様であった。絵画はとくに自己中心に考えることが多く、それぞれの芸術において、その間のつながりはなかった。美については、このような閉鎖的であり、共通の言語を持つとしなかった。美の世界はさまざまな現象となってあらわれる。しかし、その原理は一つである。したがって、同じ次元で考察を進むべきで、そのため、被服美学といえども、一般美学と共通の言語をもたねばならない。

日常生活の生き方は何か特定に拘束されている。何かのおきてに縛られて、それにすがらねば生きてゆかれない。しかし、美を感じることは、そのような拘束から自己を解放して、本来的な自己の生を感じることである。日常生活の不自由は免かれませんが、それを自覚するときおぼえる悲哀が形となってあらわれるとき、それは美である。恍惚感についても、本能的であることと、それを意識することとは恍惚感の内容が異なる。このような自覚的、意識的な立場が美である。このような美の構造の上に立って、被服はどのような特色をもって、美を生むものであろうか。

それが被服美学の課題である。

(3) 被服の美について

被服は人間が着るものである。身体をもった人間が着るものである。この身体はいわゆる人体と区別しなければならない。人体が着ることと人間が着ることとは同じではない。人体が着るとは、これは自然現象である。人間が着るとは、社会現象であり、歴史現象が見られ、精神的にも、文化的にも問題をはらむとのことである。そのほか、被服はさまざまな機能ももつ。さまざまな機能をみたすことから、被服がはじまることは論をまたない。しかし、機能は形を決定するものであろうか。被服の形を最終的に決定するのはもろもろの機能で

はなく、それは人間の視覚にほかならない。ここでいう視覚とは生理的機能を果すものとしての意味ではない。さきにのべた本来の生の自覚の方式としての視覚である。

(4) 古い美と新しい美

生きている人間が、被服を着ながら、自己のいつわらない本来的生命を自覚するとき、被服の美は生れる。しかし、同じ生命といっても古いものも新しいものもある。何かの権威にすがって生きようとするとき、それは古い生き方であろう。新しい世界観、人間観をもって生きようとするとき、それは自己のいつわらない生命の要求に基づいて生きようとするとき、新しい生き方といえよう。これこそ20世紀的生き方である。「美意識の解放」とよばれるのは現代の特質である。かつて、日常生活の場所で、その機能にこたえる用の世界は、美の世界とは別の世界と考えられ、機能を果す用具に、それとは別の遊びの目的が見出す装飾が外から附加されなければ、美しいものとならないという考えが方あった。そこでの美意識は一つの装飾主義としてはたらいっている。しかし、現代は日常生活のすみずみにいたるまで美が見出される。用（機能）がそのまま美であるという、行きすぎた誤解も過去の考察に見出されるが、有用なものにはたらく視覚性が美をうみ出すという意味で、美意識は機能主義として発動し、虚飾がすて去されて、機能が尊重される美の立場がうまれうる。生活の場にあっても、視覚的に美が求められさえすれば、そこに新たな美を生ぜしめうるものである。

(5) おわりに

被服はさまざまな角度から研究の対象となる。被服美学もまた一つの立場からの考察とみられるが、単に一翼をになうという意味でなく、諸多の研究とは次元を異にした中核的役割を演じることを認めなければならない。役に立つもののうちから形を色を発見してゆくという、被服本来の視覚的原理の上に立つ限り、正しい被服美学の道は示されるのである。

第13回研究例会

38年2月28日(土)

於同志社大学新町校舎

研究発表

「建築的価値についての一考察」 長部建築造形社 長部 謙吾氏

「欧米のグラフィック・デザイン」 浪速短大 西脇 友一氏

——スライド使用——

長部氏は建築的価値のうちで建築美とよばれるものはどのようなものか、建築美は純粹美ではおおいえないし、建築の有用性と美的意味との関聯乃至その結合方式はどのように考えるべきか、をとくにカント美学を援用しながら解明された。

西脇氏は同氏欧米旅行中に自ら取られた貴重なスライドを拝見し、同時にレタリングと新たな出現のタイポグラフィーについての解明をなされた。

第14回研究例会

38年5月11日(土)

於京都市美術大学

研究発表

「欧米のデザイン事情」 浪速短大 中村 真氏

——スライド使用——

コペンハーゲン、ハンブルグ、ベルリン、ストットガルト、ウルム、ミュンヘン、チューリッヒ、アムステルダム、ブリュッセル、パリ、マドリッド、バルセロナ、ニース、モナコ、ローマ、ヴェネチヤ、ロンドン、ニューヨーク、シカゴ、シヤトルなど20数ヶ都市、10余ヶ国を遍歴されての印象から、「環境と美意識」との関聯の深さを指適され、視覚的教養について、欧米人のそれへの努力がいかに長い歴史の上につちかわれ来って築き上げられたものであるか、ひるがえって、われわれ自身このことにいかに反省すべきか、を強調された。

座談会

テーマ「最近のデザイン情勢」

中村氏の話から、世界におけるデザイン情勢へ論議は展開し、日本におけ

るデザインの在り方への反省は、デザイン教育の問題解明が先決であるとの参
同者の意見の一致を見、この問題の根本的論議は秋の研究大会に移されること
となった。

第15回研究例会

38年7月13日(土)

於神戸市公共学校共済組合「六甲荘」

研究発表

「鉄道車輛の工業デザインについて」

——スライド使用——

川崎車輛KK 米満 知足氏

「日本で生れた飛行艇と水中翼船」

——16ミリ映写——

新明和工業KK 宇野 唯男氏

懇親会パーティー

以 上